

令和元年度第4回過疎問題懇談会 議事概要

(開催要領)

1. 開催日時：令和元年10月9日（水）13：30～16：00
2. 場 所：中央合同庁舎4号館1214会議室
3. 出席者
 - ・座長：宮口 侗迪 早稲田大学名誉教授
 - ・委員：青山 彰久 ジャーナリスト（元読売新聞東京本社編集委員）
 - 太田 昇 岡山県真庭市長
 - 小田切 徳美 明治大学農学部教授
 - 梶井 英治 茨城県西部メディカルセンター病院長
 - 川口 幹子 対馬グリーン・ブルーツーリズム協会事務局長
 - 作野 広和 島根大学教育学部教授
 - 佐藤 宣子 九州大学大学院農学研究院教授
 - 高橋 由和 NPO法人きらりよしじまネットワーク事務局長
 - 谷 一之 北海道下川町長
 - 沼尾 波子 東洋大学国際学部国際地域学科教授

(議事次第)

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 市町村間の広域連携と都道府県による補完について
 - ・事務局説明
 - ・竹田市の広域連携の取組（大分県竹田市からヒアリング）
 - ・過疎対策における県の役割について～中山間地域の振興なくして県勢浮揚なし～（高知県からヒアリング）
 - ・意見交換
 - (2) 国土形成計画と農山漁村の振興施策
 - ・国土形成計画について～「対流促進型国土」の形成～（国土交通省からヒアリング）
 - ・農山漁村の振興施策（農林水産省からヒアリング）
 - ・意見交換
 - (3) 現地視察結果報告
- 3 閉会

(資料)

- 資料1：市町村間の広域連携と都道府県による補完について
- 参考資料：2040年頃から逆算し顕在化する地方行政の諸課題とその対応方策についての中間報告（第32次地方制度調査会中間報告（令和元年7月））（広域連携に関連する方策部分抜粋）
- 資料2：竹田市の広域連携の取組

- 資料3：過疎対策における県の役割について～中山間地域の振興なくして県勢浮揚なし～
- 資料4：国土形成計画について～「対流促進型国土」の形成～
- 資料5：農山漁村の振興施策
- 資料6：現地視察結果

(議事概要)

【議題1（市町村間の広域連携と都道府県による補完）】

○主な意見等

- ・市町村合併や分権改革以降、都道府県によって積極的に過疎市町村を支援しているところとそうでないところの差が開いているように感じる。新しい過疎対策においては、何らかの形で都道府県の役割を強化する必要があるのではないかと。ただし、都道府県に義務を課すようなことは難しいので、例えば、戦略分野を作っただけでその分野については、都道府県が過疎市町村と連携することを努力義務とすることなどが考えられるのではないかと。戦略分野としては、「関係人口づくり」「高校との連携」があるのではないかと。
- ・都道府県と市町村の連携については、高校の運営に市町村が関わっていくことが考えられないかと。
- ・市町村間の広域連携については、現行の共同処理の制度が多様であることを踏まえると、新たな枠組みを作るというよりも、現行制度を充実していくことが重要ではないかと。
- ・過疎市町村におけるソフト産業（情報処理産業を含む）の振興が重要。委託先を東京の企業にするのではなく、地元の企業にできるような方策が必要ではないかと。
- ・全国的に産科医がバランス良く配置されるような施策が必要ではないかと。
- ・健康や命を守ることは、そこで生活する人の本質に関わっていく部分であり、地域医療の確保の分野では、自治体間の競争ではなく、連携、協働が必要不可欠である。

【議題2（国土形成計画と農山漁村の振興施策）】

○主な意見等

- ・地域コミュニティの中での人間関係等の人的問題を解決していかないと、良い政策があっても、できるところとできないところが出てきてしまう。地域コミュニティが活性化するような組織づくりに関する取組が必要。
- ・過疎地域の農山村は家族農業だけでは守ることはできないが、「家族農業の10年」が国連でも採択されているため、食料・農業・農村計画の中に家族農業を入れることが重要ではないかと。
- ・移住者の就労の形は多様になってきており、農業だけでなく様々な仕事と組み合わせた形となっている。そういったことも考慮した政策が必要ではないかと。
- ・日本の農山村の特徴は林野率が高いということにあるので、農業政策と林業政策を併せて地域政策として考えていくことが重要ではないかと。

- ・農村景観や生態系、伝統文化などを守ろうとしたときに、Society5.0 と相反する部分が出てくるのではないかと。このため、地域住民が地域の方向性について、合意形成を十分図りながら地域づくりを進めていく必要があるのではないかと。
- ・Society5.0 などの新しい政策が出てきているものの、それを過疎地域の側でどのように活かすかという観点から支援のあり方を考えていく必要があるのではないかと。
- ・農林水産省の資料に、「農村は、農地や農業用水のほか、農村景観、生態系、伝統文化など都市と異なる様々な有形無形の地域資源を有している。このような地域資源を持続可能な形で最大限活用することにより、農村の魅力が増大するとともに、地域における資源循環や経済循環が活発になることが期待。」との記載があるが、非常に良い表現である。このような農村の価値と Society5.0 等の時代の変化をどのようにかみ合わせていくかが課題となっているのではないかと。

以上